

I-62 地中周期力による弹性地盤上の板の波動伝播

九州大学工学部 正員 横田 謙
同 学生員 ○森 博人

1. まえがき

著者は先に、地盤上の板に線荷重が周期的に作用する場合の板の波動伝播を論じたが、ひきつづき本論文は、地中に線波源がある場合の板の波動伝播機構と同様の手法を用いて説明したところである。

2. 解法

図-1において、板が地盤より受けた反力を $R(x,t)$ とし、板と地盤との連続条件として次式を考える。

$$(\hat{G}_x)_{x=0} + R(x,t) = 0, [C_{xx}]_{x=0} = 0, [W]_{x=0} = \bar{W}_p \quad (I-1, 2, 3)$$

ここで $\bar{W}_p = W_p e^{i\omega t}$: 板のたわみ, C_{xx}, G_x : 地盤の応力
しかるとき、板の振動は次のようく表わせる。

$$\partial^2 \bar{W}_p / \partial x^2 + \rho H / \rho \cdot \partial^2 \bar{W}_p / \partial t^2 = -R(x,t) / D \quad (2)$$

次に図-1の系と次の2つの系の重ね合わせを考える。すなはち、

① 図-2に示すように、無限弾性体において2点 C, C' に同一の波源がある系を考え、x' 軸にかけた応力 G_{x1}, C_{x1} 、および変位 W_1 を求め結果のみを示せば次式で表わされる。(第1系)

$$\begin{aligned} (\hat{G}_{x1})_{x=0} &= (-2G) \int_{-\infty}^{+\infty} e^{-i\omega t} (2k^2 - k_B^2) e^{-ikx} dk e^{i\omega t} = \int_{-\infty}^{+\infty} A(k) e^{-ikx} dk e^{i\omega t} \quad (3) \\ ([C_{x1}])_{x=0} &= 0, \quad [W_1]_{x=0} = 0 \end{aligned}$$

② 図-3に示すように、半無限弾性体の表面(x' 軸)に外力 $P(x,t) = -G_{x2} - R(x,t)$ が作用する系を考える。この系の解は、ここで得られた結果

のみを示せば、次のようになる。(第2系)

$$[W_2]_{x=0} = \int_{-\infty}^{+\infty} \nu k_B^2 Z(k) / \{G F(k)\} e^{-ikx} dk e^{i\omega t} \quad (4)$$

$$\therefore P(x,t) = \int_{-\infty}^{+\infty} Z(k) e^{-ikx} dk e^{i\omega t} \quad (5)$$

$$R(x,t) = R(x) e^{i\omega t} = \int_{-\infty}^{+\infty} X(k) e^{-ikx} dk e^{i\omega t} \quad (6)$$

$$Z(k) = -(A(k) + X(k)) \quad (7)$$

しかるとき、与えたれた系(図-1)の解は第1と第2の系の和で与えられ、 $[W]_{x=0}$ は次式で表わされる。

$$[W]_{x=0} = [W_1]_{x=0} + [W_2]_{x=0} \equiv [W_2]_{x=0} \quad (8)$$

ここで連続条件より、残された式(4)-(3)と式(8)および式(2)より、未知関数 $X(k)$ が次のように求められる。

$$X(k) = \{ \nu k_B^2 (k^2 - \rho H \omega^2 / D) A(k) \} / \{ G F(k) \{ 1 - \nu k_B^2 (k^2 - \rho H \omega^2 / D) / G F(k) \} \} \quad (9)$$

式(9)と式(7)に代入すれば、式(4)の値を求めれば結局、板のたわみ \bar{W}_p が次のように求められる。

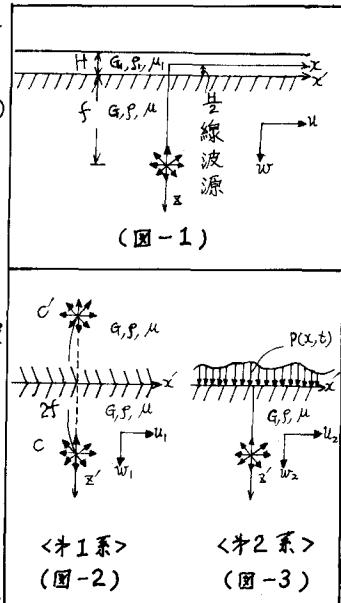
$$\bar{W}_p = (-2G/D) \int_{-\infty}^{+\infty} e^{-i\omega t} k_B^2 (2k^2 - k_B^2) e^{-ikx} / G F(k) dk \quad (10)$$

$$\text{ただし } G(k) = \nu k_B^2 k^2 - \rho H \omega^2 \nu k_B^2 / D - G F(k) / D$$

3. 数値計算および考察

式(10)を無次元化すれば、次のようになる。

$$\bar{W}_p = \{(-2) k_B G / D\} \int_{-\infty}^{+\infty} e^{-ik\varphi} (2\varphi^2 - 1) e^{-ik\varphi} / G(\varphi) d\varphi \equiv (-2) k_B G / D \int_{-\infty}^{+\infty} J(\varphi) d\varphi \quad (11)$$



$$\text{ただし } G(\theta) = \nu \varepsilon^2 \theta^2 - 6 \frac{\bar{\rho}}{2} (1-\mu_1) \nu \varepsilon - 6 \frac{1-\mu_1}{2} R(\theta)$$

$$R(\theta) = (2\theta^2 - 1)^2 - 4D\nu^2 \theta^2$$

$$\theta = k/k_0, \quad \gamma = \frac{k}{k_0}, \quad \varepsilon = Hk_0 = H\omega\sqrt{\rho/G}, \quad g = G_0/G, \quad \bar{\rho} = \frac{G(1+\mu_1)H^2}{6(1-\mu_1^2)}$$

i) 積分方法

式(11)の被積分周数は、たとえば表-1に示すように極を有してある。(極は実根と複素根をもつが、 χ, ε の値に対しては実根 s_1 が存在しなくなる場合がある。)この周数を直接積分、あるいは数值積分するることは困難であり、ミニマックス文献リト同様、図-4に示すよな複素積分を行ない、結果を記せば(12)式となる。

$$\int_{-\infty}^{+\infty} J(s) ds = (-2\pi i) \sum \text{Res} + \int_{L_\infty} J(s) ds + \int_{L_\theta} J(\theta) d\theta \quad (12)$$

ii) 留数

$$\begin{aligned} \text{Res}[J(s); s_1] &= e^{-k_0 s_1 x} A_1(s_1) e^{-i k_0 s_1 x} \\ \text{Res}[J(s); s_2] &= e^{-k_0 s_2 x} (A_1(s_2)) e^{-i k_0 s_2 x} \\ \text{Res}[J(s); s_3] &= B_1(k) e^{-i k_0 K x} \end{aligned} \quad (13)$$

iii) Branch line integral この積分を厳密に行なうことは困難なので、 x が大きな所で近似式を求める。

$$\begin{aligned} \int_{L_\infty} &= C(xk_0)^{-3/2} e^{-ik_0 x} \\ \int_{L_\theta} &= D(xk_0)^{-3/2} e^{-ik_0 x} \end{aligned} \quad (14)$$

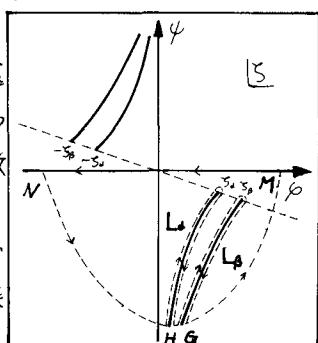
ただし C, D は定数である。

以上、式(12)(13)および(14)より、板のたわみ传播構構は次式にて表わされる。

$$\begin{aligned} \bar{W}_p &= W_p e^{i\omega t} \\ &= 2S \frac{\varepsilon}{H} (2\pi i) B_1 \exp(i\omega(t - \frac{K}{\beta}x)) \\ &\quad + 2S \frac{\varepsilon}{H} (2\pi i) [A_1 \exp(i\omega(t + \frac{3}{\beta}x)) - \bar{A}_1 \exp(i\omega(t - \frac{3}{\beta}x))] e^{-ik_0 x} \\ &\quad - 2S \frac{\varepsilon}{H} [C(xk_0)^{-3/2} \exp(i\omega(t - \frac{3}{\beta}x)) + D(xk_0)^{-3/2} \exp(i\omega(t - \frac{3}{\beta}x))] \end{aligned} \quad (15)$$

式(15)の第1項は Rayleigh 波に相当するもので、 x に無関係な一定の振幅を有し、かつ表-1に示すごとき大に応じて β の速さで荷重から遠ざかって伝播する表面波を表わす。ただし前述のような実根 s_3 がない場合には、この表面波は存在しない。第2項は x が増大するにつれて指数的減少する振幅をもつ、かつ互いに反対方向に同一の速度 β で伝播する、いわゆる定在波を表わしている。第3項は半無限弹性体における縦波と横波の伝播速度 α および β に等しい伝播速度で x に沿って表わしており、 x が大きい所では、それが $(xk_0)^{-3/2}$ および $(xk_0)^{-3/2}$ の割合で減少する振幅を有していることなどが明白となる。

x	ε	K	ξ	η
10	0.1	1.12469	4.22260	-7.41945
	0.2	1.13592	2.04614	-3.75222
	0.3	1.14972	1.30087	-2.55386
	0.4	1.14745	0.92277	-1.97307
	0.5	1.12999	0.69780	-1.63583
	0.6	1.10331	0.55163	-1.41647
	0.7	1.07350	0.45060	-1.26193
	0.8	1.04488	0.37735	-1.14662
	0.9	1.02057	0.32218	-1.05687
	1.0	1.00392	0.27933	-0.98470
500	0.1	1.08401	1.09440	-2.10141
	0.2	1.01389	0.51333	-1.16035
	0.3		0.33304	-0.84760
	0.4		0.24617	-0.68550
	0.5		0.19447	-0.58439
	0.6		0.15986	-0.51462
	0.7		0.13493	-0.46328
	0.8		0.11608	-0.42377
	0.9		0.10131	-0.39234
	1.0		0.08946	-0.36668



(図-4)

1) 山崎徳也、横田謙；『周期荷重を受けた弾性地盤上の板の運動解析』 土木学会第25回年次学術講演集(1970年11月)

2) W.M. Ewing, W.S. Jardetzky and F. Press ;『Elastic Waves in Layered Media』 McGraw-Hill Book Co. 1957